

# しずおかNIEだより

Newspaper in Education

〒422-8033 静岡県駿河区登呂3-1-1  
TEL.054-284-9152 FAX.054-284-9362

NO.  
**48**

発行／静岡県NIE推進協議会



新年に寄せて

県NIE推進協議会会長

安倍 徹

「幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い、豊かな情操と道徳心を培うとともに、健やかな身体を養うこと」。これは、教育基本法の「教育の目標」として第一に掲げられている条文です。

やや硬い文章から始めてしまいましたが、その理由は、

は何を教えてきたのだろうか」と憂鬱な気持ちになっってしまうことが多くなったからです。

もちろん、教育は学校だけでなく家庭や社会においても行われるものであり、まさに

ています。加えて、情報と人間についての問題を複雑化させているのは、人間と人間との関係にとどまらず、日々進化している対話型AI(人工知能)と人間との関係性についても視野

## 情報と人間と・・・

依然として続く多くの詐欺被害、自然災害において発生される動画をはじめとした偽情報、匿名性の高い非難や中傷などの報道に接するたびに、学校教育に身を置いてきた者として、「私(たち)

社会総がかりで対応しているかなければならない大きな課題だと思っています。「ならぬものはならぬ」という確固たる信念と決意のもと、「人間としての在り方・生き方」を追求していく必要性を強く感じ

に入れなければならないことなのです。昨年、米国において、チャットGPTを利用したことが原因で自ら命を絶った人の遺族が、精神的に依存させ死への選択を後押ししたとして、開発企業を提訴したという報道もありました。この新たな関係性は、人類が背負った重い難題ではありますが、対話型AIには、「情報」とは、同情したり賛同したりするだけではなく、時に戒め、時に励まし、新しい一歩を踏み出させてくれるものである」ことを自覚してほしいと願っています。



新聞作成の過程を説明する生徒＝2025年12月10日、沼津市の県立沼津視覚特別支援学校



背景を白黒で反転した生徒作成の新聞

授業では、中学部の生徒が学校の魅力や特徴について、障害のある友人や先輩に知ってもらったための新聞を作成したことを紹介、学習面や生活面の違いなどを記事や図表にまとめて実際に読んでもら

NIE実践指定校2年目の県立沼津視覚特別支援学校(沼津市米山町)は2025年12月10日、新聞を活用したNIEの公開授業を同校で開いた。視覚障害や知的障害のある中学部の生徒が「私たちが読みやすい新聞」をテーマに取り組んでいる新聞づくりについて発表した。市内外の小中高教員ら約30人が参観した。

## 中学部「読みやすい新聞」発表

## 沼津視覚特支で公開授業

＝関連記事2面へ



# 新聞づくりで情報発信

## 意見交換会 AI活用の課題も共有 公開授業

県立沼津視覚特別支援学校での公開授業後に行われた意見交換会では、学校側と参観した教員らが視覚特支での新聞活用について意見交換した。

考えることで、情報を届ける楽しさの発見や自他理解につながったと報告があった。

担当の前島紗恵子教諭から、生徒の主な情報源は、文字が拡大できるなど利便性の高いインターネットだが、新聞づくりを通じて、見え方に適した読みやすい表現方法

参観者からは、生徒たちの読みやすい字体や色の発表に「大人にとっても見やすい人それぞれだと改めて気付かされた」「情報をどう伝えるかの基本に立ち返らされた」といった声が上がった。



公開授業後に意見交換する教諭ら＝2025年12月10日、沼津市の県立沼津視覚特別支援学校

人工知能(AI)活用の授業を参観した教員からは、広く教育現場でAI活用が進む一方で、生徒が真偽を確かめず

### ICT活用 新聞読み込む 中学部2年自立活動

中学部2年の「自立活動」の授業では、生徒たちが情報通信技術(ICT)やAI、音声点字端末を活用して新聞記事を



デジタル機器を使ってN I Eの学習に取り組む生徒

信じてしまう危険性が課題と述べ、AIとどう向き合い、指導すべきか議論が交わされた。安倍徹会長は「新聞、デジタルとともに活用して、子どもたちの学びたい思い、教員の教えたい思いが結実した実践だった」と講評した。

読み、理解を深めた。

生徒は視覚障害や知的障害により新聞記事そのままは読み取りが難しいため、教師とともに専用アプリを使い文字を拡大して読んだ。続いて、AIで記事を分かりやすい文章に変換し、どんなこ

とが書かれているか、どのような気付きがあるかなど教師の質問に答える形で記事を読み込んだ。担当した柏木雅章教諭は授業の狙いについて「ICTを活用することで情報を得る手段が増えた。この体験を積み重ね、将来の生活に活かしてほしい」と語った。

## 2月に実践報告会

指定校6校 成果や課題

県N I E推進協議会は2月14日午後1時半から、実践報告会を静岡市駿河区の静岡新聞放送会館で開く。実践指定校として2年間N I Eに取り組んできた東伊豆町立熱川中、静岡市立清水第六中、御前崎市牧之原市学校組合立御前崎中、浜松市立浜北北部中、桐陽高、県立沼津視覚特別支援学校の6校が、成果や課題を発表する。参加無料。参加希望者は、QRコードから申し込む。



## N I E実践で学びに広がり

県立沼津視覚特別支援学校 前島紗恵子教諭

本校には、全盲や弱視などのさまざまな見え方の児童生徒が在籍しています。視覚に障がいがある人にとって「新聞」の活用は難しいと捉えがちでしたが、実践を通じて新たな活用の広がりを実感しました。

小学部では、縦書きと横書きの新聞を読み比べ、読みやすさについて考えたり、自分のことを新聞にまとめたりしました。具体的に新聞と関わる活動を通して、表現活動の広がりや障がい理解のきっかけとなりました。

中学部では、「読みやすさ」を追求し、作成した新聞を記者の方に添削していただきました。そして、「読み手を引き付ける写真や見出しの工夫」「情報を正確に伝えること」を意識して作成し直しました。お互いの新聞を読み合うと、字体や色合い、文字の大きさが異なることから、自分と友達の見え方は

違ふことに気付きました。読みの見え方に合わせて作成し直すことで、情報を分かりやすく正確に伝えられることも学び、自己理解・他者理解にもつながりました。また、記事の内容を生成AIによって精選し、友達と共有する楽しさを実感する姿も見られ、生成AIの活用の期待も高まりました。

高等部では、文字や画像を読み取りデータ化することで天気図などの新聞記事を活用しました。台風の進路予想をすることなどで考察が深まり、自身に合った方法で情報収集していきたいという次の目標ができました。

実践を通じて、個々のニーズに合わせた新聞の加工などの技術が進むことへの期待も高まりました。今後は、生徒が互いに考えを伝え合う場面においてN I Eの活動で学んだことを生かしていきます。



# 竹内さん(浜松東小2年)優秀賞

いっしょに読もう  
新聞コンクール  
県内2人2校奨励賞

日本新聞協会主催の第16回「いっしょに読もう！新聞コンクール」の審査結果がこのほど発表され、静岡県内からは、浜松市立東小2年の竹内詩織さんが優秀賞を受賞した。奨励賞に伊藤亜由奈さん(浜松学芸中2)、西尾和真さん(沼津市立高1)、学校奨励賞に浜松学芸中、沼津市立高が選ばれた。

竹内さんは、学校用給

食に普及が広がっているストローレスの牛乳パックについて県内での取り組みを紹介した静岡新聞の広告記事を取り上げた。「新学期に学校に行ったら、ストローレスの

牛乳になっていたのうれしかった」と話し、「ストローレスになったことによるメリットとデメリットを考えようと思った。全国の学校やスーパーにも広まってほしい」と述べた。

家族や友人と一緒に新聞を読み、感想や意見を書いて記事とともに応募する本コンクールは、全国の小中高生から国内外から計6万1428本の応募があった。最優秀賞に3人、優秀賞に30人、奨励賞に120人を選んだ。団体応募は470校あり、優秀学校賞に15校、学校奨励賞に184校を選定した。

新年度も専用の応募用紙を使い、新聞協会が静岡県NIE推進協議会に送付する。9月8日必着。

さんは1972年の芦屋を舞台に執筆した小説を紹介し、「一番役に立ったのは当時の新聞。新聞は小説のヒントの宝庫。活字の向こうに庶民の気持ちも感じ取れて、新聞に記録されるのは財産」と語った。

会場では全国約70校・団体によるNIEを通じて防災・減災の事例を紹介したほか、児童・生徒が作成したポスターも並んだ。静岡県からは「防災」をテーマに3校が参加。常葉大常葉高は本紙を通じて能登の中学生との交流を機に考えた「女性専用避難所」についてまとめた。NIE実践指定校の御前崎中は南海トラフ巨大地震に備えた記事学習や防災新聞発行を紹介、同じく桐陽高は11年から福島県で行う被災地研修で復興支援や地域交流により災害時に役立つ人づくりを報告した。

## いのちと情報考える

神戸でNIE  
全国大会  
本県3校が防災新聞展示

「第30回NIE全国大会神戸大会」が2025年7月31、8月1の両日、神戸市内で開かれた。兵庫県内の教育、新聞関係者のほか、全国から約1

700人が参加した。大会スローガンは「時代を読み解き、いのちを守るNIE」。県内からは県NIE推進協議会の安倍徹会長とNIE実践指定校の教諭やNIEアドバイザー、新聞関係者ら約20人が参加した。

初日の開会式は兵庫県立芸術文化センター芸術監督で指揮者の佐渡裕さんとスパーキッズ・オーケストラによる演奏で幕開け、記念講演として芥川賞作家の小川洋子さんが「言葉は人をつなぐ」と題して講演した。小川

さんは1972年の芦屋を舞台に執筆した小説を紹介し、「一番役に立ったのは当時の新聞。新聞は小説のヒントの宝庫。活字の向こうに庶民の気持ちも感じ取れて、新聞に記録されるのは財産」と語った。

会場では全国約70校・団体によるNIEを通じて防災・減災の事例を紹介したほか、児童・生徒が作成したポスターも並んだ。静岡県からは「防災」をテーマに3校が参加。常葉大常葉高は本紙を通じて能登の中学生との交流を機に考えた「女性専用避難所」についてまとめた。NIE実践指定校の御前崎中は南海トラフ巨大地震に備えた記事学習や防災新聞発行を紹介、同じく桐陽高は11年から福島県で行う被災地研修で復興支援や地域交流により災害時に役立つ人づくりを報告した。

### 次回全国大会 7月に広島市

「ニュースとであう社会」とつながる『自分』を育てるNIE。元五輪代表の為末大さんによる基調講演のほか、広島県内のNIE活動に取り組みむ学校による公開授業や実践発表が行われる。

「ニュースとであう社会」とつながる『自分』を育てるNIE。元五輪代表の為末大さんによる基調講演のほか、広島県内のNIE活動に取り組みむ学校による公開授業や実践発表が行われる。



全国から教育関係者らが出席したNIE全国大会神戸大会。2025年7月31日、神戸市内



県内3校が「防災」をテーマにしたポスターを発表した=同8月1日、神戸市内



## 全国大会神戸大会 参加者の感想

### ■塚本学教諭(常葉大常葉中・高=NIEアドバイザー)

分科会では、西宮市立浜脇中学校と兵庫県立北神戸総合高校の公開授業を参観した。前者はNIEノート(新聞スクラップ)作り、後者は、記事に「ツッコミ」を入れ、問いを立てる内容だった。両校の生徒たちのコミュニケーション能力の高さが印象に残った。当意即妙な受け答えで、高校生は会場の初対面の方にも積極的に意見を求めている。また「デジタル」ではなく、新聞「紙」を使った活動であった。初めて参加したポスター発表は、新聞づくりの参考になった。

### ■中村都教諭(静岡市立千代田小=NIEアドバイザー)

「新聞で培うメディアリテラシー」の授業では、震災に関する同時期の子ども新聞の読み比べをし、その違いを子どもたちが共有していました。その中で、情報の内容や発信者の意図を正しく読み取るには、受信者が想像力をつけていくことが必要不可欠であると感じました。どんなにデジタル化が進んでも、人と人とのコミュニケーションで成り立っている情報の獲得方法はアナログ的な部分であり、時代を問わず大切にしていかなければいけないと痛感しました。

### ■浅井みゆき教諭(桐陽高=継続校)

2日目は前半後半ともに、西宮市立浜脇中学校の実践を聴講した。前半の公開授業では、中学生たちが自分たちの意見をきっちりと述べていること、グループごとの話し合いも積極的に意見が出ていた。渋谷仁崇先生の「地域の課題を自分の課題としてどうとらえることができるかが重要」との言葉に改めて、社会と自分の日常の繋ぎ役としての新聞の重要性を再認識した。生徒にいかに関心を持ってもらうかに対しての工夫された授業に、今後の本校の活動の中で取り入れていきたいアイデア満載の実践だった。

### ■久富大輔教諭(桐陽高=継続校)

兵庫県立須磨友が丘高校・岩本和也教諭の防災教育実践発表を拝聴した。高校生が防災ジュニアリーダーとなり、小高連携で授業や防災訓練などを行う取り組みは、防災教育を行っている本校にとっても大変参考となった。高校生がファシリテーターを務めることで、主体性や社会参画意識が高まり、小学生には防災を受け継ぐ意識が芽生える。これにより地域防災力の向上やコミュニティーの活性化が進み、さらに高校生のキャリア教育につながる点も印象的であった。今後、本校でも地域性を踏まえた独自の防災教育に生かしていきたい。

### ■藤井優教諭(静岡市立清水第六中=継続校)

近年、新聞を読む人が減少しており、中学生も新聞を読む機会は少ない。このような現状にある中で、いきなり新聞を読む活動や活用を促しても、形だけの活動になり意味もないものになってしまう。だからこそ、新聞を読むことで何を学べるのかということを理解し、今後の生活に生かしていく必要があると、今大会に参加して特に感じた。このことを意識しつつ、学校生活の中で新聞に触れる機会を設けていきたい。

### ■原田直樹教諭(浜松市立浜北北部中=継続校)

西宮市立浜脇中学校の公開授業では、3年生が気になる記事をスクラップした「NIEノート」を活用し、熱中症対策や災害などの社会課題について、自分の考えを発表していました。お互いの意見に対して、多面的な視点から感想を言い合う生徒たちの姿が印象的でした。授業者の先生からは、「1年生の頃から新聞記事を読み、自分の意見を持つ活動を行ったことで、興味の広がりといった成長が見られる」という話があり、新聞活用の効果を改めて感じました。

### ■瀬戸浩孝教諭(長泉町立南小=新規校)

NIEが、探究的な学びを通して、「情報社会を主体的に生きる」力を育てることを、姫路市の実践を通して実感しました。子どもたちは、地元の記者が取材した多くの記事から姫路の町の魅力を多面的にとらえ、自ら調べたいことを見つけ、計画を立てて探究する姿が印象的でした。私も、情報を基に考えを深められる実践を進めていきたいです。

公開授業で来場者の意見を聞く生徒ら

=2025年8月1日、神戸市内



### ■佐藤秀次校長(静岡市立西奈小=新規校)

全国大会神戸大会に参加させていただきありがとうございました。南あわじ市立沼島小中学校の実践発表では、新聞活用を通して児童、生徒がふるさとを愛するふるさと愛につながっていました。地域に学ぶ、地域を学ぶ、地域で学ぶ実践はとても参考になりました。新聞記事を活用することで読解力や表現力が身に付くことが分かりました。明石市立大久保小学校では4コママンガを活用して絵とセリフで読み取る力をつける実践でした。楽しみながら新聞の4コマ漫画を活用することは効果的だと思いました。

### ■加藤直子教諭(常葉大橋小=新規校)

「過去から未来へ」1995年1月17日。まだ生まれていない子どもたちが、過去の神戸新聞から当時を知り、読み取るポスター発表を目にした。30年前の阪神・淡路大震災を「自分ごと」として捉えようとしている子どもたちに心打たれた。神戸の中心街は、復興が進み被災の跡はほとんど感じられない。あの日の記憶を辿ることで、当時を想像し今だからこそできることが見えてくるのではないかな。今後、NIEの活動が過去から未来をつなげる一助になればと思う。

### ■金原遼教諭(相良高=新規校)

今回のNIE全国大会神戸大会では、分科会の実践発表から探究学習における新聞活用法を学び、多くの知見を得ました。特に、探究学習が教育の柱となる中で地域に根差した相良高校の特色を生かし、地域と連携したNIE活動・探究学習を進めたいです。また、ポスター発表で見た新聞を活用した選挙の教材化は、情報収集能力を育む実践的なテーマとして有効だと感じました。今後は、企業と連携した「ことまど」のような多様な教材も活用しながら、NIE活動を推進していきます。

### ■小倉慎一郎教諭(菊川市立堀之内小=新規校)

甲南小学校3年生の「シンプリオバトルで主体的な学びを」を参観した。児童の記事の要旨を読み取る力や、その内容の正確さに驚いた。また、記事に対する自らの思いを語る様子は、3年生という発達段階を考えると驚異的だと感じた。全ては、何気ない瞬間に新聞に触れさせたり、スクラップなどの取り組みを続けたりなどの継続的な学習に裏打ちされたものだとし、持続的な取り組みで、児童の力はこんなに育つのだと勇気付けられた。

### ■山田偲緒教諭(浜松市立富塚西小=新規校)

今回、新聞を使った実際の授業を見たり、実践について聞いたりすることができ、とても良い機会になった。自分の好きな記事や自分の地域の記事を探す活動など、まずは児童が興味をもって活動をスタートすることが、意欲的な活動につながるのだと感じた。教師として、日々の生活の中で新聞に触れることができるよう環境を整えたり、話し合いなどの活動をするときには、教師がファシリテーターとなって児童の深い学びを支えたりと、新聞を使って児童の力を伸ばしていけるような活動を考えていこうと思う。